燕石十種

江戸塵拾

五輯

八

仁智 679 51

679
51

宮城県図書館

江戸塵拾序

一武の神羅漢寺を形—江戸の塵拾らて
佃島の形の奇巧の聖代のつゝ今世に残り
ものんや詩の名歌うつ人形く若也す五月の
菖蒲葉ふ皮を集めは書き残され—江戸初子の塵
を拾ひうんて五冊の形の事—屋敷の伽の形れ
らしをおそるのみ

志田氏
蔵書

巻之壱目録

一大六天社　一蛇除の守
一不轉の守　一玉造社写
一幸神の社　一富士祭の蛇
一疱瘡の呪

一常大般若
一序草水鉢
一甲子立花
一義興の矢
一咳の老女
一平沢の占

巻之二目録

一水の字石
一五ボシ石
一力持の石
一石ナマス
一二本櫻樹
一ウハバミ
一雷の生捕
一京極の鎧
一沙羅双樹
一石の閻魔
一玉子火縄
一鮒石
一蝿石水鉢
一水分ケ石
一亀の甲石
一楓の大木
一大蟇

一櫻の井
一小町の井
一犬根
一兒ゝ岡
一小町堂
一用の櫻
一橋墓の山伏
一長伏稲荷

巻の三目録

一塙氏の解毒
一跡考浩ひ
一定力弟慈向
一桐月の細工
一施入湯
一真先田楽
一米つきたんご
一雷除の薬
一早祥
一お花ざつま
一白むくの歌
一吉原豆腐
一お亀たんご
一おまん鮒

巻之四目録

一隅田川諸ゟ
一千鳥ヶ淵
一安藝草履
一上杉筆
一草摺引摺丁
一三島町
一蛍燈籠
一トッカエベイ
一虱ころせ藥

一金山寺味噌
一牧屋うどん
一仙石茶筌
一長門印籠
一ネブト町
一八百川町
一細字更
一木下塵拂

巻之五目録

一芳笛
一朽木草履
一雨夜の笛

一掃部笛
一小豆老女
一伽藍石

一旭耳掻
一狐の嫁入
一猫老女
一化物の間
一筆談

一元日の化物
一猫狐を産む
一五足の犬
一生魚ふ人
一牙歯の名医

都ヲ五巻目録終

江戸塵拾巻之壹

霊符之社

鎮宅霊符の社所々にありといへとも爰に云は妙見菩薩
の像なり宝暦十二年本所三ツ目堀三太郎霊験を以
て居屋敷に霊符神を勧請す額に北辰宮と書しハ
三井親和が筆跡なり毎年八月祭礼有り

大六天社

永田町第松家の屋敷に太田道灌勧請せしと云此宮
ノ祠にまつりしを物ぐるひ人形を掛るに忽平癒する事妙なし

不轉の寺

赤坂今井谷に若露開基にて其人去りし志賀隆乗翁が得る所にせし此寺
此寺を不轉寺と人皆號を除くる神の守りとし一年山王祭
礼の折から龍町にて町家の子號を掛たる上を祭所の

年車引腐す父母を哭し身を人行を者一朝おそれて葉
を行くへしふ程形くに氣身の内にてこと形く平
日の如し餘りのふしきふ通りの人西況ふ四尋ふ石
霧にふうちたのちをうけさせたるよりおのの子個ふ
出てふ死ちることひし形一世雪の寄形形ふ一少大ふか
ふ一ふ

志賀隨翁を年代長公の信之世をのうを保山
出雲を家を有一風雪を出ふ一てもまし
有法院ふ代江戸ふ信ふ今時百七拾九年
牧除の守
松平ふ和守紙足短少歌行集ふを出す牧の芳恵のす
出守を所拓すふ人牧ふ出ふ形一又さてれたふ人
ふ出きを出雪を以てふを拓ふ毒ふ虎れ出たふを

ふ平ふ為ふふ数人ふ
幸神の社
自ふ墓ふ五何人の勸請せ一ふ云事を知ふ說て此社ふ
ふ引て五ふ五ふ五ふ発然しておもふ可一ふ歌屋ふ
ふを所の人大ふ形ふ長邪の久宮を改光幸邪を十ふを
人を形やまふす形く一て幸を一のふの邪ふ形ふ玉の
玉造之社の寫
北八所堀ふ小一の稲荷の社を出ふの所人伊勢長ふ
ふて者此稲荷を志ふ一て一年ふ和光ふ出て大
松ふて玉造ふ形く一說て宮造ふて形を拾一奉ふ信戸
ふ一て八十堀の形ふの宮を玉造の社の如く先覺す明
ふ宝暦十一の春形く
疱瘡の呪

五代慶安元年の頃肥後の国唐津の
士形り此年の比野猪に出んとて弓矢を持て海辺を
ありくに人の異人に逢ひ其物更に人をふりかへり慶安四年
やき者出て弓矢をつかひて異人を打て立やう
早き事形れ命を見る所の慶安の陰の
守を与ふ面白き慶安元年を捨て永寿を形り是
を待て和歌にて見る其後行府に来て此所を形す姓の
程を此形るに形り形る坊に来て身を形て上者
此の謂に行て今の慶安元年二代繁昌せり

富士祭の蛇

駒辻富士祭現祭永六月朔日麦藁にて蛇を作りて下
形るに宝永の比西性寺人に前風を書て与へ
つくりて祭永の日市に賣る珍敷個に形て諸人求之

其年の秋比年疫病時に家を形り其此蛇の
蛇を持て家に一本に疫病の病を形り
士祭りの者に蛇を作て今慶安の居屋に形り

常大般若

山下法門に鍋面行慶に寄て年中二大時年大
般若物語を寄る毎人に形り故に
雷の生捕

外櫻田永井伊賀守屋敷前に元文四年六月雷落る
に雲を出一の赤き物の雲に乗る所を人大勢欠
付彼鄭を打たす生を公に今出家の什物に形て年を
出用千に家に見せしむ其物を大の如く牙根に似て
色つくり形あり形り

陶器水鉢

[illegible]観音堂前左右に屋[illegible]の中鉢蓮の葉の形[illegible]
是を[illegible]和三年[illegible]仙石因幡守[illegible]
観音別當[illegible]院を寺格[illegible]大小石[illegible]の節
出[illegible]仙石家の右の中鉢寺[illegible]の日[illegible]
之れを[illegible]院留[illegible]て出[illegible]て[illegible]

京極家鐘

京極家の鐘を[illegible]水[illegible]
高[illegible]屋[illegible]藤[illegible]
[illegible]鐘の形[illegible]

甲子立花

[illegible]寺[illegible]別當[illegible]院[illegible]
人[illegible]當寺[illegible]仙[illegible]
[illegible]甲[illegible]日[illegible]
[illegible]

今[illegible]

仙羅双樹

四[illegible]天王寺[illegible]天文[illegible]
豊[illegible]守納之時[illegible]日光[illegible]
宗仙寺[illegible]

義興の矢

矢[illegible]義興[illegible]
[illegible]
稲荷[illegible]

石の間麓

今[illegible]院寺中[illegible]南部家[illegible]寺[illegible]宝永

之氏南部の領る長谷に住て此潤玉を拾ひ登すれば長谷
府の所形を遥中自身の家に入て登るれば高さ
三丈ばかりの石像形ありて女人に似たり陸天其と主
人ばかりの家なれども其時庭中の下屋敷の
庭の中に置れを金地院殿様の長男と伝て招請
今の所に建て高き所にをき又世人茶屋
を備て彩をかざり奇特甚多

咲の老女

筆花稲葉丹後守中国数ふるに高さ或丈余の自然石
を老女の形に似て咲の彩をかざり早速年急出る形石
に諸人豆入せ茶を持く出石にしがらみを
ちらし

玉子火偈

玉子の名高く常の火偈を火にまきて出すに然筆の先きの如く玉子の所火偈を銭
袍に偈く藤堂家の方面数に銭袍のみの足駄を
ちらす

平氏の占

西宮橋平氏所に居る平氏角に占を所なり或時打年雲州出雲
形の如きを神の宮に遥此一色出
雲州出雲人を所尋に是陰陽一身に備りたる人形
なり故に知不申に者申と云雲州
人可出雲国家なり故に知不申に者申と云雲州
を出て居る五畿内の名と言ふ名作を
者角を記らず物を居り角に仙角出ず仙角

仙臺の分三ヶ所ハ宮城郡の内にて[illegible]
[illegible]人[illegible]ハ[illegible]感稱[illegible]

江戸塵拾巻之七終

江戸塵拾巻之二

水の字石

平川町の分ハ[illegible]端東の方へ傾斜に向ひて長く出たる石形にて九の内ハ水の文字を[illegible]石を踏人ハ[illegible]何人の彫しか其故を[illegible]

鮒石

赤坂門[illegible]形にて[illegible]見れを向の石垣の中ニ[illegible]九井寺[illegible]の石の鮒を作り其形ハ石垣を[illegible]長さ[illegible]何人の作[illegible]

五ぼう石

市ヶ谷門の梯形の内石垣ハ[illegible]五ぼう[illegible]程[illegible]

鉢石

[illegible]

松平大和守屋鋪江戸見坂の上屋敷書院の手水鉢形くなる石
ニて大サ六尺ニ横三尺高サ五尺余有り然らしき大石形り

力持の石

御手洗つぶ豎借林の修ニ行る八拾貫目車力大勢ニ而持之り石ニ
彫付て有り右の大勢名前々現在形り

水分の石

酒井松平美濃守屋敷下屋敷ニありて池の中ニありて是より流出
る此石ニ有りて左右ニ分れて流候之名也

石鯱

亀井戸天神の亀の井より流れ出る水の中ニあり大キサ壱尺
五寸斗の鯱の形チニ作りし石形り此石何方へ折て三ツ一対の内
ニ元の所へ帰りし其外の一ツ行形る人の作也しやうを不知

亀の甲松

上野ニ住む老人の説ニ在住院殿御世の時神宮寺ニ而皆出来候由御宮の北の方御殿の所ニ而新ニ被成御建候を掛手させられ候ゆゑ誠ニ松のふまんすき其所ニ而種々松室保の頃ニ候しなき

上野寒松院の門前ニ有り松の根茂つて自然と亀の形ちニ似
たり今ニ此松枯ぬ依之芝の上ニ山しき松を立て居りしが所なり

二本櫻

松田の桜ハ寛政四年七月十日の大さ稀なる形り御出張の桜も松ケ梢ニ而当所ニ持ちて當時松平陽屋敷ニ而其外ニ知り其外ニ御出張の所ニ松平伊豆守殿の屋敷を作り

二番町松田金ニ郎屋敷ニ十間四方の大さ有れ桜形り花の時を
諸人見物ニおよぶる程ありて花屋敷と唱ふ下樹ニ居まる居候節
御出張の屋敷ニ有り大さ有れ桜形り松田の櫻ニ見事

楓の大木

芝切通し金地院の玄関前ニ有り弐拾間四方大さありし楓く
ぬるる葉日本ニ而南形たるよし秋の末から紅葉形ひニ染て色鮮の
詠之當寺此所ニ有りより数百年今ニ至りまて寺の大宝形
しそふばの大木ニ依之形り

ウワバミ

麻布加くブ坂ニ高木ニ而下屋敷ニ有き形ち池有り其尾ニ

作毛ふ出さ者のやう様ふ記出一く墓を見る人所一墓ふ
たれを他の辺ふ出て記きるの古へ所ゆ事まて行くるの見
るふ首の大サ馬の沈の如ふして墓大きく所

犬墓

松平義農守方勢本所こ行く方三丁余の居所ゆ此年こ作毛一
年故ゆて此居を住ゆ年ゆ近き頃住ん出ゆ時
ふ以ゆ家の玉閣ふ犬一匹の上下前ゆ老人ゆ来て
原項の古ふふ様ふ様所ゆ敷て作居ゆ墓ゆ此ゆ此
私作居の居を住ゆ成ゆ所ふ之作毛ふ第ゆ付第ゆ
作年此義ふ止ゆ様こ者を申述ふ其作可申ゆ
ふ以て原項の土足ゆ作毛ふ思ふ者を面ゆて
此見ふ者ゆ犬一匹の上下ゆ墓ゆ背ゆ
ふ形く大さを人の居ゆ如く両眼ゆ如ふ即到義

農守、申達ゆふ口上の如き聞届ふ様扶ゆ居を
ふ出ゆを出ゆ元文三年の事所

櫻の井

本枕所様生舞ゆ出ゆ所ふ作毛ふ此ゆ
此井の水壇城所様の井ゆ作其故を不知
年を重て花の如ふ散ゆ而暴ゆ不
小所堂

麻布南部家の方家の屋ふ源六先家の作閑
小所の像を之ふ享保の年此ゆ人勢度の時ゆ像ゆ
く出ゆ所く記ゆて今ゆ其作の様所

小所の井

多ふ出ゆ此井を作ゆ所の像を此年ゆ堀ゆ
廿一出ゆて井の作ゆふ出ゆ様ふ井こ所き作ゆ

江府の櫻

駒込吉祥寺の表門内に左右に数百本のさくら木あり
享保の比飛鳥山並へ御成之節此寺に一本の桜盛なりし
しを　上覧ありし　咲出候へきよし是より所々
寺僧抜其後此桜数百本御手つから植させられ年々盛
の比より江府市中其一枝を手折しも立事を禁せしむ

巨大根

雑司谷鬼子母神別当大行院より毎年十二月江内々出て御
元禄廿三年宝永二年寺男持参の其数の大根を献す世にめつらしき
ことなり

卜養狂歌集に曰
雪ふりける日の
橋のたもとにて
高く雪見とこそ

橋甚の山伏

市谷御門の御橋甚の上に山伏出て往来の人の施しをうけしが
御法の上を請してこれまでこの比よりして世に久しく出ける

けふは橋の上に出て
かの人雪ふりて居る
かみを身て
同じ所にやはり居る
あつまりてこゝろ身に
雪ふりしとて
ふる橋
此歌享保の比の
事なる事もあり
それを見付の橋に
銭を出して出るを
まつりかたきに
来れる市谷の
かりしかるへき
今も絶て有

享保の比松平何某市谷御門番勤役の節是を見て出し立
儀御橋甚の上に山伏の出る事を差置事もなきよし進禁
せられ市谷田町立宝院と云山伏町奉行大岡越前守へ訴
出なるを其和の事先より市谷御門橋甚に出て往来の
御法を請申家業に仕来り候処不届に付何某様より
仰付けられ御成り右に付て家業相成さる事も難渋仕候
前年の通り相付御免にて橋甚に出て往来の人の施しを
是まて年々其方共右御門に罷出候事を御門番見附
御申させ置てよし候其和かより難渋出来りし不及是を
られ難渋のよしもこれ其後市谷御門番はかしん急度
御免被遣せられ候是御橋甚へ出る山伏の事有御禁制御成候
旨被仰渡されこれ其和の事先より罷出候て今度御止に成
成によって家業相止難義のよし市谷田町立宝院と申山伏

出れは其まゝ年久しく秘しおける者の手に渡り其後さし置けれ
ハ家に伝へ今にて此度申出る趣にて持れよりも出来しと取申越なる信
之所の審中迄り此度寺院にて稲荷墓の堂山内に出る也

児ヶ淵

社平安藝寺生玉宮寺の蔵にて何ヶ所の寺家中の旅僧にて抱
小児を淵に投て其後人に申伝ハし也て其身も又淵へ入て果ぬ
よりて名付て児ヶ淵と云へり埋りて名のみ残れり

岩佐稲荷

岩佐稲荷大明神の社ハ淡路の北の基高寺家後の岩佐家
由緒ヶ廿年前二位稲荷大明神也しが当所に移し勅許の
正一位稲荷大明神也当所名主岩佐家の所なり大勅
許の趣なり

江戸塵拾巻之弐 終

江戸塵拾巻之三

塙氏の解毒

此医師塙宗悦家より解毒丸を出す先祖は肥前唐津の
人なり名医の聞へ有て江戸に居る信之妻子を連れ家来二両
人を召つれて乗船せし順風に帆を上て既に筑紫の海浦遠く
漕出す処に俄に黒雲起て何れとも風強く打ち水を入る人
や声を出して騒ぐいきもとら従ニ一寸も出ず爰時に船
の御威光て船中の男女老若を棄ておそれし海中に飛入
塙氏の娘の少女袖の引まわして海底に入る父母是を見て
古此形なく時に娘生年十七才なり深く歎きて常に存し
保ける此時しもおそる気色なく両親に申事ありて
やさしき声して北郎家常をまもりて父母を事ゆえ形を留府
下りて至りて居に帰りて入て其後見へす形なり

父母を形平きたなきいとまをもとめまうさ
けふ至てかくて風やみ形をたづねくゝ船をも
きせんとすゝる時菊の娘蓮海佐をふうて海平と云のゝ文
母をはつて云ものゝ蓮海の元恩をもて不孝忘れうのかゝ
ゝ人百畏の生ものゝ人をもて空を我母形くゝふとたゝ我宮へ
くゝる時を以て別れ者をも尊恩を祈孝の名一葉を
かくゝ事の此葉を持ん人見形平と結ぶ所知らず空 墻
宗旨の名を幸たゝ海平の親の墓ゝ形のもへ——さらゝ
たゝ玉ゝ此ゝ空ゝ声と共ゝ踊をかくて形ゝ名墻代に生て
名墓の名を高ゝ人ゝふ墻氏ゝ出名常ゝ用の時ゝ解
毒丸形ゝ共ゝ孫病を治ものゝ事ゝ神の十ゝ

留除の藥

小川町ゝ名ものゝ住所那佐丸筋出之一年蓮祖百九年今年ゝ

七百九十年忌ゝ
来ゝふかくゝ

今ゝ秘傳ゝ
ゝ事ゝ

かくゝ世玉ゝ出名ゝ古留ものゝ伝授ものゝ共時代命とゝて那
佐丸筋出葉を伝人ゝ那佐門前ゝ市を形せく先
那佐丸筋留ゝ問答ゝ出葉をつたへ伝ものゝ共ゝ留
ゝ金名の勢ゝかくゝ世ゝ先つらしきもの形ゝ

跡者傳ゝ

ゝ戸蓮女形屋川蓮ゝ踏屋一三八百屋ゝ出名ゝ
時ものゝ共時代ゝ伝ゝ月解けたゝ伝ゝ
形をさん出ものゝ百形ゝ立ゝ人ものゝ立てはものゝ藝を形ものゝ
共ゝ始ものゝ西形伝ゝ出ゝふ事はゝかゝ

早禅

立蓮女形共毒名丸国枝武道ものゝ名を作ものゝ
丸ものゝ早ものゝ共ものゝ三ものゝ屋芝兵衛ゝ形

[illegible]

定九年　越向

江戸色鑑中お仲義秀鶴明和三年の秋市お染を作る
蔵様子の物語中寛定九年中を移して大ふはやりを中ち
こふ本ふ月江戸野お大者中て人を恋慕をひき中て
家中　記録ならひ中和大ふ利ち　所せんかと所く
当初迄の慰言成寺の立く宮を戸家三木三郎
中ち山者を中ち山才兄出番すして大。鶴所れ中ち
大者ハはきれて　物ひて不せん中ち上州く移て見を
やを中おもひ三者の日の乗中て熊谷の中ち中て物ち
て名ぶ　はられを休名ん中ち　所ち迄堂ふ入て始く体ら
ひ長ち　ふく江戸の立く急く藤ふはう戸野村ふ中出来
中て物中ち移ふ鶴　ひて不上ふ　ひて新年所ち此

藤人を殺して脇金をとり出ひ中ち逃ふ中来ち脇を
ちの　殺ちれ中ち人ひきふ中ち所く足をちの和ち
移迄ち成やりち中て海ふ口ふ中ち　彼藤人ち
ちの中て出番ふちちふ　ひてすき方を見迄ち中
ちち内月ち　中ち　みはふ中て新を見合せち中ち家
来の三郎ふ中て中　さすちの戸野お和を　ち長迄和
すを門中ち中才兄中　金子を渡　中ち　直て
脇を中て移ふ和ち　中ち　長戸野お中　長ち中ふ
脇ち　移ふ和中ち　仲義定九年の越向を知者の
中ち中ち中ち　ち中和

お花　こ阪

江村宗十郎ち堂ち和延ち　長ち中長
を作ち　お花半七お染幸和おち　傷ち染を悔ち

甚平ふお花の餘をて見事ふさんしき せ一故是をたて居せ

樹万の細工

鶴所伊田興を清せつ人万所人ゆう五廣形万者山て寺ち和ん
ちう山ゆて寺の工徳寺工寺万形ふふと形き細工ゆうてた
府ふゆうて左宅のらん間を作ゆす左廣寺の我寺せ一日和と
形ゆて形ゆを形きやうゆ和

白むくの歌

新春所武丁自角山ゆ屋と白糸せつ万拾女万の
儀ぎきふふふ形ふぶ者形ふ歌万ふゆをせ雪月花を
春むを甚心ゆうて情ゆを水原く我中寺花何ゆ一せ
つ万ゆふふふくゆこうひ赤せを史跡ゆも形万角一せ形せ
ふ海を所義和の所人筆万者何ゆ一角を身待す時て白糸寺長
方へゆこうの白むくを遠万逆一首の和歌を原一

糸ふゆる物を物ゆ一ふゆをう一れ我原ふたゆ一形ふこと万 拾女 白糸
寺長何ゆ一逆

ゆこ屋の流れの赤を白糸の拾れをゆる形ふしこをき

弦入陽

右山ゆ寺ゆゆ一芋形の長日ゆゆこれを風呂をたきて寺万新の
人を入万長を山若きんへんのはちはちに鶴寺ゆ作す

春糸ゆ一ふ

春糸所一の名おと世を廣八角田川のれを次製すゆゆ長
うくくして世ふ形ふふ形

真崎でんぐ

真崎稲荷の芋ゆゆやく世所所一の名屋と上寺ち
ゆ形ゆ一糸のゆ一ふを出てんくゆ寺形す甲ゆ長きん
るもの正一宝暦のち一年ゆ寺ゆ和

お亀ばつ

麻布長坂の下に長屋を建て小商ひの貧人話計屋文吉といふもの家
住居して暮しの生活を勤め稼ぎ呉れし品川の沖を家業
一日を暮しかねて出でし小さき亀を買ひ求め若亀章の
亀ふ異く成さきかつ出一の大きさくみて長く小さき耳生
したり屋文吉ふ勢ひ持ち帰りて長をやー形小ばびー人
で尋常にて見るもの名を引き出し屋文毒ふ金川
宿の百姓の娘ふて四ー きもの形を屋文ふ進めて
茶見世を出つらひ祝宴より弟を立てたんごを製え
て長を切き形ふ亀を見物ふ来て休みて
多んぜを買ふ長よりはやり出て亀たんぜふて屋文を
出たんさて利を切て女房祝宴金川ふ来て用化を求究紀
暮の烟り屋敷ふ入て今ふ来若屋敷ふ出来知れ

形ふ成長を文の形へを所のもの入るとて四ー こたんぜを喜
しふ女房類ふ来く亀ふ記きく女形れを世の人亀たんぜを
ふ来ふ亀たんぜふ出ふ来ふ

未つき園子

本所ふ来ふ町ふ定宅ふ居ふ人ふ亀ふて来を
つ来年を四ふ出ふ生活律義形ふ者ふて対ふ剛力ふ
て来ふれを一日ふ米を石を売ふ若屋米ふ銭米ふ
稼来ふて出ふ一年秋階ふ米商売形ふ時右律年ふ
く好ー置ー を多ふ出ふ形ふて毒ふ出す今来つきたんを
出ふ会ふ保所ふさふて現年形ふ

おまん書ー

京橋中橋の間ふて長を屋ふ府の見ふ夕日の雲
ふ映ー 紅形ふを見て来ふ ー半時ー おまんふ屋ふ

その名をもれをやうしておまん鄭を名付る宝暦の初名す
宝長年間是を用ひたり

江戸塵拾巻之三終

江戸塵拾巻之四

隅田川諸白

浅井雷神門前に有り本所中ノ郷細川備後守殿下屋敷の
井の水を汲て製造す

金山寺みそ

有法院様御代法華宗祖師和尚の名産形れを是を献す
毎年貢献所有りしを今に製すれども彼地の如
ふうみを出来さるよし

ふうみ

品川寺御寺より毎年献上仕る尾和尚を以て
製せられ一生をふうみを名付る其製を尋ねし
敬愛
宝永の末ち始めて王陽長崎より大唐碁名手山て世ち 後

性
幸和の店人形しつまらのすおこて生質の業成ゆて口論しおよぶ
癖を抑去せ其揚を退けんと思ふへきとふの移ても古来より
う證ほ町の裏店ふ住て世哉思ふ身形れハ往形ハし稅経
もかられすふらく店をつとふかし今一ヶ年ぎふふとやの数
ふ出て少ふしき業し出生活の苦声をはり上ても嘆れハ
此人是ら声ふうかれて出筆ゆ培ら大勢ふ売れられをひより数
多売りすりのひ声ちじまたり

安藝草鷹

藝州の牛宮書町出て人ぶ筆商ふを作る店人形うかれて作
るふ業ありゆて蓋鋭をおふ筆師と号ち形し藝州の家来也
筆ふを売り筆履ゆふ其後世ふひろまりて安藝筆ろ
申して今ま此水をようぶすの比匠筆の浅まりはしまる

仙石茶筌

仙石越前守下屋敷保呂の辻番出て作る延享の比大坂堺町の町
人千宗部の茶筅ふ達して其子新八といふものその身
持はらふりかて讓請家田して新町ふ辻んでせん
ら形く江府ふ出て山下より此辻番所の番人と成る者の日の
形をき法れし茶筅をあつらて辻番の前ふ置て往来の
人形ら細工の店形うさふを見て喝采にはやり仙石の茶筅
と進め其名を一寛延安の比新八ふふとひ古稀く頃ら其孫
て茶の湯茶せんをおつる者形し新八のひろ先祖お辞しす
せんくと称て仙石のちやせんと出て讓るまてちやしある

上杉筆

寛永の比上杉家ふ左理德成出て人ぶ匠流の手語をよくす
る者行りて府筆師の内ふ家ふ会し筆形しらて自ら筆
を由出て作りふふ探究して上自形り此德成より門人とも多し筆

を後世に伝えるとは此事歟

長門印義

秋月長門守藤原の氏也馬の足を割て此方義を結
たる事如此歟 第八代利久平井利徳市義を作る
すきを見て上方にて五文字を以て種々の市義をつくり出せり
利徳八代家の家を弟に譲り世に隠れる時代也

草摺印 横田

外櫻田南部家也伊東家の間を以て西家の後に属す
此中鶴の九曲たる也此印は世一流也

横ふり横田

上杉氏の上養泉寺也泉寺の号の所を以て
てるの印也四人横ふり所なり也

三島 所

芝信長寺也郡内の横国を以て鍋まる平まで横
の三角裏出ふり印也四人ふり名つちやうの中

八名川 所

陸奥永久橋の西山家人百姓を以て其外和泉守
嶋出家引出也信之板代所也事を板代の文字つの比
ゆうゆうなるやうにて八名川所也書也

葦山 所

青山百人所の西関西出家人百姓方和竹寺ふ七月にて
出を西うる家にふしうるちやうちんをさをの生ふ月
出するよりふれを見るふしをふしの生ふ月
つて名づく年々きする形なり

細字 細重

西五郎 末澤所也さる本文仲也一者細字細重を能

定宝年 京撰
俳諧 三野の歌

米粒や三社の詫も
民のまる
巌水
安宝すに比す米粒
に細字を書ちとす
行し形る画

すまひまりに居出羽行きしかも唐人三人壱寸四方の紙に百人一首
を書付てさらしく又ぎん形んの中に三百んおん三十三体
をきざむなどまる事形を細工形り宝暦のころ出を売たり
せつうん 画れ

貞享元禄のころの唐
猫狸に手の形生写形
せい行し筆中ら
トツカヘベエ外に行名や
のまろすあり
〇大刀のおれしまろ
久へ名あて筆
中形りは入の雲
形り志れたき
細くよりて行り羅
の比から〜まろて
古き其所をよる
さる形り
又文寿来朝文鑑
五ノ巻佐渡国の住左
角力書を地黄養の
解く古銭四の書せる

江戸の町を飾を持て出うらん画れし此壱丁行くあの行り
古き鐘かほかたを写して行きのからしおさめ正徳のころ
茅原町に出の香取石出しん名前行り出れた紀州の者
出おりしし江戸に下り其者ほを尋すて来りしたれをとらく
行る時紀州道成寺の鐘書寺の佐りし鐘を出んまふせん
合かりて鋳造れ出して其者ほ生活正成者にて出の思応
無形り拙者すら出ての鐘形れを力を合せて市中を出ふせ探
ひなてあ名を創り江戸町ほまを寄りれ出鋳に出て
其古き鐘を以て鐘を速出せん出の本音しよき古き銅の鋳

の居首を久くして気
遠出の筆見て
たり此古下行筆
保形れしお正
徳より八巳前出
し其の形を無し

出来る形を其像を以て其銘形りしらし宝暦三の年池田
小形町甚右衛門出て者飾出古銅の利像を言ふ廣に出う工
文して是を作出巳古都に出てせうらん画れし出うなひあらく
まりかたくさうん形りしるの宝暦九年の比形り

大下塵拂

木下伊州は茶道に志くしんふかく小川東円寺に尾和尚通
此居の奥儀を極む風雨大雷の節も人目を恐び供をと
も連れず唯壱人之の茶室に通ひ出しけ形りされ共茶居
に於ので八大和尚の居を出り門人大小居に免る伊州塞
〇茶に於る到来のまし鉢の元り香を出りてちりはらひをつ合
其細工頭て出され今此居の居和出形れまて伊州茶居の比事れ
形りすや

志らみらせ葉

当麻田所ありてや蔵衛長を嘉る由往の時まて今まで
那る町人なりし其比岸部宗の医師并当忠次と云者広府
へ出し時ありてや主まふもおなりす今比ふ来て那しけるに
此蔵衛史部か西国に行けるを見て何ぞ時蔵衛を迎へ
来て其方へきたりしきてよふて史部が来の家業に出精
兼ずし我一世ふそ任ふ事しむれを衣鉢に譲ぜしに
志ろみをきかす部の志ゆし其ふをはらむやあきに来那
れも其を宗弘めて者のと申那み也那す事し也広業を
与へしかハ史部那ハ其業を相続して党をうき
つてやかたくことを世葉隠那し

江戸塵拾巻四終

江戸塵拾巻之五

鶯笛

東叡山の林麓根岸の里に松川伊助といふもの此所の鶯の
音を聞て始めて鶯笛を作りて飼のうぐひすのつけ
声と成にあてよし是より起りて小児のもて遊びとなれり
元禄の初の頃谷中に鶯の声を写したる竹笛ありて
上方より鶯を求めに此笛に鶯をつけて放ちし事に依
て当所の鶯声たくみなりしによし松川伊助備ふる此所の
うぐひすの音をふくて笛を作り附声とせしなりしだたところ
也其形まれなる事也西国の都
うぐひすも田舎の方の鶯なれどもたとへ音をハ鳴迄覚

其後此
俳諧女子集
今日やはや
鶯笛吹く子の
日向那
此笛中寛永年
那る年に遊び廣く
鶯笛と云ふの
ふるく作りを思ふ
事し
但其の居中作り
那ら今の如く
製作中せ那く
今の製作に出候
節にありし

掃部 省

井伊掃部頭為替の中間是を作りて甚毒に要宗主記也

[illegible]士[illegible]して馬の皆を作るを注ぐ此皆を[illegible]て形ちうん
ぐひ逆角木苧の中を[illegible]馬の足の痺むる形[illegible]
世ふ弘まりて[illegible]の[illegible]業を形れり

杉木草鞋

杉木を在守型等の中間佐渡[illegible]の作り出せり四ちん皆
小等〳〵岩石苧の中を踏ふ其鞋形く遠[illegible]形等ふ
草形ふる形く足の痺むる形一道の[illegible]者形ふ者子皇[illegible]
を用すして形ふ足の指きす妙ふ此代[illegible]知

小豆老女

元飯田町[illegible]の市[illegible]の下間部伊[illegible]ふ者[illegible]
東ふおよひ玄[illegible]ふて小豆を[illegible]ふ育する[illegible]人
育すれ[illegible]此[illegible]所[illegible]
よりて[illegible]

市[illegible]
[illegible]

雨夜の笛

市[illegible]用[illegible]平家の[illegible]
[illegible]笛の音[illegible]
[illegible]

伽藍石

[illegible]黒[illegible]大半[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

旭耳搔

東叡山池の端の行燈屋の耳かきみて幅をかきかへ形ちふ
古家を取成せし二月三月[illegible]
弘[illegible]ちの竹個上げ七寸ふ宝暦の頃[illegible]

元白の化もの

陸奥[illegible]の[illegible]毎年[illegible]元白来りて表門を開ふ
其丈七尺計の山伏堺中[illegible]剛扶を形なをせ[illegible]
て[illegible]の前ふ立ちて[illegible]
出ちの形[illegible]
[illegible]

きつね稲のよめ入

宝暦三年秋八月の末ツ方堀本[illegible]の[illegible]の嫁入行[illegible]
[illegible]
[illegible]
人数人[illegible]
比提灯数十[illegible]の女[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

猫きつね稲を産

目黒[illegible]
[illegible]

[illegible]を[illegible]猫の如く白黒まだらにして[illegible]
猫の[illegible]して[illegible]の形[illegible]猫常に山の
出て[illegible]して[illegible]ねず[illegible]

猫　老女

本所割下水[illegible]原[illegible]文[illegible]毎年[illegible]七十七心能[illegible]極く
常の猫を[illegible]歩[illegible]歩[illegible]足を飼ふ其猫死れば死骸を
[illegible]持ふ[illegible]て置[illegible]
[illegible]を調へ[illegible]程して[illegible]の[illegible]入置翌日出て見れば寄く
[illegible]して[illegible]の猫[illegible]中[illegible]人[illegible]申[illegible]ふ回向院[illegible]ふ[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]剃[illegible]宝暦十三年の[illegible]八月[illegible]ふ[illegible]世[illegible]
其[illegible]剃猫[illegible]ふ[illegible]
[illegible]て[illegible]猫の死骸[illegible]ふ[illegible]同[illegible]
[illegible]

五　足の犬

宝暦十年[illegible]秋[illegible]所[illegible]を[illegible]飼犬[illegible]を[illegible]姫[illegible]の
[illegible]を人[illegible]心[illegible]せ[illegible]
[illegible]足三本[illegible]
[illegible]

紀州の人間

松平出羽守[illegible]
[illegible]紀州を[illegible]

蛇　[illegible]

[illegible]者[illegible]下[illegible]
[illegible]の上[illegible]
[illegible]蛙[illegible]
[illegible]

生涯の志ねがはくは花の下にて春死なんその如月の望月の頃

むかしよりよしなしごとを見るにつけ

筆　談

本邦寺院にて行る家の儒士何某朝鮮人世世筆談を能鮮人の問ふ貴
玉衣服の色何を以て貴とするか答へていはく唐の例黄色を貴ぶ
を貴ぶ黄色惟は墨漆なり弦楽を嘗意即物の色なり
問人風一行

牙　蓋の名

稽古寺にて行る日本稽十郎庵七を清母ふるを納む一を世紀
女秘又昭和の時稽山安吾なる雲ふる出産を折つけしを軸とす
晶稽の子孫なる者ありしを出産を生涯を嘗ふる納
先考なる名浮にちなる人の産句
一葉あるて稽名の中なるべし

江戸塵拾巻之五終

江戸ちりひろをなる人の作なるを知る
一日閑窓にて誤れる字を改定閲をを補ふ
なる事を記りは四年餘年の事
ふ形なる形なる事を記りき好古の
人の動を形る事を文の拙を以て其説の面きを
出るへ出ふらぬ事に人ふかを知ふ
文政癸未夏　柳亭種彦

江戸の塵

文久辛酉秋新刻

江東子

尚史氏
藏書記